

教育・研究等業績一覽

[illegible]

2 現行授業の目標と教育効果及びそれに対する自己評価 (記述式：900字以内)	(1) 現行授業の目標と教育効果 科学的な知識に基づく基本的な栽培技術を習得し、迅速に進展する施設園芸に対応できる科学的思考力と問題解決能力を発展させ、農業の担い手としての能力と態度を育成することを目指している。 授業は単なる知識の伝達にならないように、植物生理や土壌などの基礎的な内容から始め、各分野の専門的な技術の理解を深め、さらに実際の営利栽培での活用につなげられるように関連付けて進めた。講義と実習を連携させ、知識に偏りがなく、自力で栽培できるスキルが身につくようにした。 (2) 自己評価 技術的な習得はおおむね達成されたと考えている。しかし、学生の考える力の醸成については十分ではなかったと感じている。授業内では自分が持っている知識を総合的に結び付けられるように課題を出し、自ら考えて結論を導き出す機会を設けたが、学生が主体的にアイデアを生み出し、問題解決に向けて試行錯誤する場面は限られていた。 今後は、実際の営農現場で想定される課題をより具体的に提示し、グループワークやディスカッションを通じて学生同士の意見交換を促すことで、主体的な思考力の向上を図りたい。また、成果の発表や振り返りの機会を増やし、自己の考えを整理し表現する力の養成にも取り組みたい。																		
3 学生による授業評価も踏まえ、教育改善への取り組み (記述式：900字以内)	(1) 現状の授業 講義は教科書を基に、パワーポイントを使って授業を行った。また、教科書に不足している分野や最新技術は北海道の営利栽培の実態を踏まえながら追加した。実習は、初めに実習内容と目的、注意点などは配布資料を使って説明を行った。実習の理解を深めるため、レポートを多くした。授業中に学生が積極的に発言できるように努めた。また、ブラックボードで小テストを行い、学生の復習と教科の理解に対する自己評価の機会を設けた。 パワーポイントを用いた講義については、図表や画像を多用したこともあり概ね評価された。一方で、分野によっては専門用語が多く、理解が難しいと感じる学生もいた。また、学生からの積極的な発言が少ないことも課題である。 (2) 改善の取り組み（予定） 学生の反応や理解度を適宜確認しながら、授業内容を柔軟に調整していくことを予定している。学生からの発表機会を増やすなど、授業中に学生が積極的に参加できるような取り組みを進める。特に難解な分野については、講義内容の見直しを行い、より理解しやすい資料や説明方法を取り入れることで、授業効果を高めることを目指す。																		
4 教科書、教材の作成状況 (記述式：300字以内)	講義はパワーポイントを印刷したものを配布し、配布できなかった資料はブラックボードに掲載して復習できるようにした。実習では必要に応じて実習手順の資料を配布し、できるだけ現物を用意して実感できるように工夫した。学生からは教科書の使用について意見があり、予習・復習の必要性を理解させることが課題となった。また、土壌作物分析実習では、各養分が欠乏したキュウリサンプルを用意し、自らの分析結果から科学的に欠乏要素を考察する授業を追加した。																		
5 学生の指導（課外活動・厚生補導等） (主要10件以内)	<table border="1"> <tr> <td>2023年度～</td> <td>果樹研究会</td> </tr> <tr><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td></tr> </table>	2023年度～	果樹研究会																
2023年度～	果樹研究会																		
6 その他 (主要5件以内)	<table border="1"> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> <tr><td> </td></tr> </table>																		
研 究 業 績																			
1 研究分野・活動 (記述式：350字以内)	研究分野「花き類の栽培技術および省力化技術開発と新規品目の地域適応性」 前職の北海道の農業改良普及指導員として、主に花きの技術指導や産地づくりに携わってきた。北海道の花きは、冷涼な気象条件を活かした夏秋季産地として発展してきたが、農業構造の変化や高齢化による労働力不足により栽培面積は減少している。近年の温暖化により、これまで冷涼な北海道でも高温による品質や収量の低下も課題となっている。 新たな農業構造に対応した、新しい技術を取り入れた技術改善と、実需者が望む新規品目・品種の地域適応性について検討することが必要である。簡易施設における実用的な高温対策の確立、省力化した栽培技術もこれからの花き栽培に必要な技術と考えており、研究を進める。																		

2 研究課題 (今後の展開・可能性を含む) (記述式：350 字以内)		栽培技術としては、①施設栽培における環境制御の活用②環境負荷を軽減した栽培方法の検討③省力栽培技術 ④簡易施設における高温対策 ⑤機能性資材の実用性などに取り組む。また、道内ではまだ栽培事例が少ない品目についての寒冷地での適応性や栽培方法について検討する			
3 研究助成等 (主要 5 件程度)		(1) 文部科学省科学研究費 (2) 学内 (3) 学外 			
4 資格・特許等 (主要 3 件以内)					
著書、学術論文、作品等の名称 (主要 15 件以内)		単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行又は発表 雑誌等又は発表 学会等の名称	要 約
北空知のスターチス類生産における花粉症対策の一考察		共著	2010 年 12 月	北園談会報 44 号	シネンシス系スターチスの花粉発生量は多く、生産者の花粉症状の要因である
鈴バラ栽培における生産阻害要因 (虫害) について		共著	2010 年 12 月	北園談会報 44 号	すずばら(ロサ ルブリフォリア)の先枯れはオオバラクキバチの害である
スターチス・シヌアータの茎葉黄化に対する採花後遭遇積算温度の影響		共著	2012 年 12 月	北園談会報 46 号	市場で発生する茎葉黄化症状は、採花後の積算温度が影響し品種間に差がある
スターチス・シヌアータの茎葉黄化抑制に対する品質保持剤の効果		共著	2013 年 12 月	北園談会報 47 号	市場で発生する茎葉黄化症状には、水揚げ時にジベレリンの処理が有効である
2016 作物展望 需要期見据えた栽培管理の強化を		単著	2018 年 1 月	ニューカントリー	季節変動が大きく花きの需要には、開花調整技術や作型の組み合わせが重要
2017 作物展望 適正な温湿度管理で品質の安定を目指す		単著	2017 年 1 月	ニューカントリー	気象の影響を少しでも小さくするためには、様々な資材や機材を有効に活用する
2018 作物展望 需要の変化に対応した品目選びが大事になる		単著	2018 年 1 月	ニューカントリー	輸入切り花の増加や需要の変化をとらえ、商品力の高い品目選びが大切
かぼちゃ貯蔵腐敗を減少させる風乾処理の検討		共著	2021 年 4 月	北農第 88 巻 2 号	貯蔵腐敗には、風乾処理時のコンテナ内の通風ムラ改善と送風温度確保が重要
研究業績 (過去 3 カ年分)				国際的活動 の有無	社会的 活動の 有無
著作数	論文数	学会等 発表数	その他		
0	0	0	0		
学 内 運 営 業 績					
1 役職、各種委員会等 (主要 10 件程度)		2022～2023 年度 教務委員会委員 2022～2023 年度 FD 委員会委員 2022～2023 年度 広報委員会 2024 年度～ 学生・地域国際交流委員会 2024 年度～ 入試委員会 			
学 外 活 動 業 績					
1 本学以外の機関 (公的機関・民間団体等) を通しての活動 (主要 10 件程度)					
2 学会・学術団体等の活動 (主要 10 件程度)		日本養液栽培研究会会員 北海道園芸研究談話会会員 北海道花き懇話会会員			